The Japan Society of Educational Sociology

■ 書　評 ■

小山静子・太田素子［編］

『「育つ・学ぶ」の社会史―「自叙伝」から―』

一橋大学　木村　元

本書は，自叙伝を資料に用いて，人がどのように「育てられ教えられてきただけでなく，育ち，学んできた」かを明らかにしようとしたものである。そこには，これまで往々にして教え，育てる主体を強調し子どもを客体として捉えることになっていた教育史叙述への批判意識が前提にある。子どもは常に教えられたとおりに育ったわけではない。むしろその多くは自らで育ったのであり，そこで働いていたのは形成（フォーミング）の力であった。本書の特徴は，自叙伝の分析を通して，幕末以降近代日本の人間形成の実相を家や共同体の多様な人間関係を視野に入れ，そこでのさまざまな知の伝達のありように注目しながら，学校教育が与えた人間形成への影響をみようとした点にある。

本書の構成は以下の通りである。『日本人の自伝』，『伝記叢書』を資料とし，何人かの著名人について記述した１から３章と，日本経済新聞掲載の短い自叙伝を多数検討した４，５章の２つの種類の章からなる。時期と対象ということでいうと，近世の共同体的秩序と葛藤しながら幕末までに人格形成を遂げていた男性，近世的な環境が残るなかで自己を作りあげていった「明治の子供」たち，女子教育の草創期に進学体験を経た女性，学校教育体制が確立した1890年代から1920年代に高学歴を獲得した男性，さらに近代学校と男性のセクシャリティ形成の問題も取り上げている。

自叙伝の記述をみるにあたって，著者自身が育ち学んだ時代に興味深く感じた様々な「真実」の叙述が貴重であることはいうまでもないが，研究上の貢献として第一にあげられるのは，自叙伝を史資料として人間形成のあり方や世代間関係を捉えようとしたことである。自叙伝はオーラル資料，日記資料とともに，意図的な作為や主観的な曲解を含むものとして歴史研究において傍系の位置におかれてきた。とはいえ，このところの教育の社会史研究の進展はこうした資料を積極的に受け止めるためにはどのようにすべきかという議論を促している。本書において先行研究として強く意識されているヴィンセントは，自叙伝に貫かれる主観性を資料的な価値の限界や制約のうちにみるのではなく，何を「真実」として捉え，訴えたかったのかが示されている資料としてむしろその意義を評価している。

本書では，そうした主観性を色濃くもった自叙伝の叙述にはたらく「記憶と選択という二つのフィルター」に注目して捉えようとしている。前者の「記憶」のフィルターが強くはたらく例として，近代移行期の自叙伝のなかにこれまでにな

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

かった「瞬間の感情の記憶や断片の映像的な記憶」など幼年期の内面的な記憶が登場している事実の指摘があり（1章），後者の「選択」のフィルターについては，相馬黒光が描いた，同時代の自叙伝には見られることが少ない家族以外の精神的な交流の詳細な叙述のもつメッセージ性の指摘があげられよう（3章）。これらは「記憶」を作り上げている見えない「選択」も含めて，いわば入れ子状の「記憶」と「選択」のもとに存在するともいえる。

こうしたフィルターを介してなりたつ自叙伝に描かれた事実はどのような性格をもつのか。その検討は同時に日記やオーラル資料が明らかにしている事実の性格を自覚させることにもつながると考えられるが，こうした広がりも含めて教育の社会史研究のための資料論を深めるための一石を本書は投じていると思う。ここにいう事実は，いつなにをしたといった客観的事実のレベルではなく，どのようなものとして構成された事実かということである。日記と自叙伝とにおいての主観性のありようの違いに置き換えてもいい。両者ともひとりの人間によって生きられた歴史の事実を表す資料としての位置づけが与えられる。しかし，他者に咎められることなく，自己の人生の物語に脚色を加えることを可能にする日記とは異なり，自叙伝には読み手を想定した作為が入り込む。書き手が想定している読者とのあいだの相互作用という媒介性の介在である。

その点から見て，本書の場合，回顧にともなう「古き良き時代」的叙述への留意（5章，220頁）はなされてはいるものの，対象である著名人の書き手と読み手という相互作用の側面をもう少し考慮に入れてもよかったかもしれない。自叙伝は書き手の社会的な地位や位置によって性格が変わる。著名人においては読者が幅広いということもあり自己提示の側面以外に啓蒙的（教育的）な側面が強く示されることもありえるからである。事実，本書でも鳩山春子に限らずそのことはいえるように思われる。

学ぶことと育つことの事実の解明はそれを総括するときにかかる幾重ものフィルターとの関係が考慮されねばならない。同一人物の自叙伝と日記との比較研究などフィルター自体を対象とする研究によって自叙伝研究における事実はより深められていくのであろう。本書はそうした方向性も示してくれている。

◆四六判　296頁　本体3,000円
藤原書店　2008年9月刊

NII-Electronic Library Service